

狭い一側面

宮本百合子

青空文庫

私が、初めて瀧田哲太郎氏に会ったのは、西片町に在った元の中央公論社でであつた。大正五年の五月下旬であつたらうか、私は坪内先生からの紹介で二百枚ばかりの小説を持ち、瀧田氏に面会を求めて行つたのです。

留守かと思つたら、幸い社におられた。小さい木造洋館の石段から入つた直ぐのところ^{はしご}に在る応接室で待つてゐると、程なく二階から狭い階子を降りて一人の男の人が出て来た。体じゅうの線が丸く、頬つぺたがまるで赧い。着流しであつた。紺足袋に草履ばきで近づき、少し改つた表情で挨拶された。

「私が瀧田です」

言葉の響の中に、つよい北方の訛があつた。その訛が、顔や体に現れる微細な動き、調子とひどく調和してい、一種性格的なものを感ぜさせる。——私は、この特徴に富んだ人をどう理解してよいのか分らなかつた。赧い赧い頬、それと極めて鮮やかな対照をなしつつぼやぼやと情熱的にほやついている漆黒な髪、特色ある早口、時々私を視る眼光の鋭さ。生活力の横溢が到るところに感じられた。同時に、単純でない何ものか——謂わば狷介というようなものをも一面感じられる。——

私は、自分からは、どう出てよいか分らず、瀧田氏から訊かれることだけを答えた。忘れたが、きつと、いつからものを書いているか、というようなことであつたろう。原稿は置いて帰ること

になった。どういうきっかけからだったか、瀧田氏はその時、

「あなたは、一生本当に文学をやって行く気ですか」

と訊いた。私は、その質問を寧ろ意外に感じた。勿論その積りなこと、そうでなかったら始めから来はしなかったらうという意味を答えたのを覚えている。

——初対面の時の、この一口で云えない瀧田氏の印象は、今も猶そのままに遺っている。然し、氏がどんなに中央公論を愛しているか、ジャーナリストとしての仕事を愛しているか、そればかりは当時の私にでもはつきりと分った。氏が雑誌につき、計画について話す調子には、いつも見えざる焰があつた。知らず識らずの間にその熱が聴手にも移った。瀧田氏は瀧田氏で雑誌について

喋っているのだが、聞いているうちに聴手は聴手で、また、聴手自身の仕事に一種の張合や熱中を感じて来る——そんな傾向があるのであった。論文でも、文学的作品でも、よいのが集まると、氏は、実に悦んでそのことを話した。瀧田氏のそのよろこびは、単に、雑誌の編輯者という立場からばかりでは決してなかった。

氏自身、芸術鑑賞上一見識を持ってい、芸術愛好者としての純粋な亢奮が伴うのであったらしい。氏が、ジャーナリストとして他と違っていた大きな点はここにもあった。よい芸術品を得たい熱情が、編輯者としての利害と結びついた形であった。

瀧田氏に会うのは、一年に僅か数度であったが、その時分、氏はいつも、奥ゆきのたつぷりした俤に乗って来られた。羽織、袴

であつた。そして、早いうちから、まだ夏になりきらないうちから、勢よく扇を使い使い話す。田中王堂氏の原稿は、書き入れ、書きなおして御本人さえ一寸困るようだとか、多分藤村氏であつた、有名な遅筆だが、（鵜沼の東屋でもあつたのだろう、）おくれて困るので出先まで追っかけて、庭越しに向い合わせの座敷をとつて待つことにした。さて藤村氏の方はどんな工合に行つてゐるかと硝子障子のところから見ると、一字書いては煙草を吹かし、考え、考え、やつと一字書いたが、消す。煙草、煙草、また一字、という風で、自分まで実に辛かつたとか。そんな断片的な話をよくされた。二十前の小娘を相手では瀧田氏もその位の話題しか見出せなかつたのだろう。丁度、田村俊子氏の生活が動揺し

始めた頃であつたと見え、非常に疲労の現れた作品を送つてよこしたということも聞いた。素木しづ氏も存生で、一人お子さんが生れた当時であつた。生活が楽でなく、困り抜いた揚句であつたろう。深夜、一台の俵に脚の不自由なしづ氏と赤ちゃんが乗り、良人であつたU氏が傍について西片町の瀧田氏を訪ねて来られたのだそうだ。金策の相談があつた。けれども、瀧田氏は、誰でも知るあの言葉つきで、

「断りました」

と云つた。

「なぜ？」

「私は一さい情実には捕われないことにしています……書いたもの

を買うなら別だが」

一つの挿話にすぎないが、私は、氏の編輯者道とでもいうべきものの一端を見るように思った。

大正九年の初夏に一度、西片町の家を訪ねたことがあった。二階の部屋に通された。そこには、氏の特に愛蔵する夏目漱石氏の書、平福百穂氏の絵などが豊富に飾られてあつた。別に、鴨居から一幅、南画の山水のちゃんと表装したのがかかっていた。瀧田氏は、ぐるぐる兵児帯を巻きつけた風で、その前に立ち、

「どうです、これはいいでしょう」

と云った。筆の細かい、気品のある、穏雅な画面であつた。

「誰のです」

「それが、私は（確な名を忘れた）××だと思ふんですが、落款がないんです、手に入れた時、夏目さんに見せたら、こりやあいと云っていた」

書齋の方に座つて、陶器の話などした。私の父がこの頃少し凝りかけていたので、自然そんな方面に向つたものと見える。そんな時も、氏は元氣よい話手であつた。そして、日本画壇の、所謂大家というものに対して、率直な不満を洩した。平福氏の画が好きなのは、その人格がすきだという話も聞いた。画壇に於てばかりでなく、各方面に、そういう、或る見識に立脚した批判と選択を持った人であつた。

考えて見るのに、私は、瀧田氏の極小部分しか知らない。而も、

その小部分によほど、弱音器がかけられていると思う。大人は子供に水を割った葡萄酒を飲ませる。——そんな意味で、ひとりでに、極自由な、澆漑と全幅の真面目を發揮する氏の風貌に接する機会のなかったのは残念であつた。

〔一九二五年十二月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十七卷」新日本出版社

1981（昭和56）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五卷」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「中央公論」

1925（大正14）年12月号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003年9月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狭い一側面

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>